

年末校長講話（令和2年12月25日）

ひとつの歌が世界をむすぶ

校長 小川幸司

はじめに

令和2年の最後の授業日です。3年生の多くは、まだこれから受験を控え、勉強を重ねる日々です。進路が決まった3年生、そして1・2年生も含めて、自分のやりたいことが思い切りできない「コロナ第三波」の時代状況に不安やストレスを抱えていることでしょう。

今年の最後に、「皆さんは、自分が追いつめられたとき、本当につらいときに、自分をなぐさめる何かをもっていますか」という問いかけをします。「なぐさめる何か」は人それぞれ違うと思いますが、ひとつの大きな力は、音楽・美術などの「アート（芸術）の力」です。

1 不思議な運命をもった歌

音楽は、人間の歴史とともに、この世に生まれました。何万年も前の原始人の遺跡からすでに、動物の骨に穴をあけて笛のように使っていた楽器が発見されています。歌も、3000年前の古代中国文明や古代ギリシア文明の頃からすでに盛んでした。

さて、これから紹介するのは、とても不思議な歌です。戦争を推進する“軍歌”として作られたのに、“反戦歌”として歌われたという不思議な運命を持った曲なのです。しかもその歌は、ドイツの歌なのに、第二次世界大戦中、敵味方関係なく歌われました。つまり敵であるイギリス人にもフランス人にも愛されたのです。ある戦争のまっただなかで、敵も味方も同じ歌を歌っていたというのは、ふつうはありえないことです。でもそれが実際にあったのです。

その不思議な歌…それが、「リリー・マルレーン」です。

舞台は、今からおよそ90年前の1933年、ドイツにヒトラー政権が成立し、ユダヤ人迫害と第二次世界大戦の泥沼に転げ落ちていくことになったときのことです。ララ・アンデルセン(1913～1972)という売れない歌手がいました。スイス人の恋人がいましたが、彼はユダヤ系だったので、いつ二人が会えなくなるのか、時間の問題でした。ララは、1939年の2月、「リリー・マルレーン」という歌を歌い始めますが、売れたのはたった60枚でした。

その年の秋、ドイツは隣国ポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まりました。当初、ドイツは破竹の勢いで進撃を続け、北ヨーロッパ、オランダ・ベルギー、そしてフランスの占領に成功しました。さらに2年後の1941年秋、ドイツはユーゴスラヴィアの占領政策をすすめて、ソ連の侵攻にとりかかっていました。

そんなある夜のこと、ユーゴスラヴィアの放送局からの21時57分のラジオ放送で、「リリー・マルレーン」が、ひょんなことから流れました。実はアナウンサーをつとめていた兵士が、ドイツ語のレコードを箱からガサガサ探したところ、偶然手にとったのが、まったく無名の「リリー・マルレーン」だったわけです。

ここから歴史の歯車が一気に回転し始めます。放送局に数えきれないほどの、無数のリクエストがかかってきたのです。次の日も、放送局は「リリー・マルレーン」を流します。また圧倒的なリクエストの嵐。繰り返し、何度も流します。21時57分、この時間が「リリー・マルレーン」の流れる時間でした。ユーゴスラヴィアで、ロシアで、アフリカで、ドイツ兵がこの歌に耳を澄ましていました。やがて針をかけすぎてレコードが壊れます。それでも何千という熱狂的なリクエストは止まず、放送局はベルリンから新しいレコードを取り寄せます。

21時57分…、この放送のあいだはドイツ軍が攻撃してこないのですから、自然とイギリス軍やフランス軍の兵士たちも「リリー・マルレーン」を聞いたのです。もちろん彼らは歌詞の意味はまったくわかりません。しかしながら、そのメロディーが兵士の心にしみいっていきました。兵士た

ちはめいめいが勝手な歌詞をメロディーにかぶせました。世界史上でも稀有なことだと思いますが、敵の陣営でも同じ歌が流行することになったのです。

「リリー・マルレーン」が流れるこの瞬間だけが、第二次世界大戦のつかの間の“平和”になったのです。

2. 「リリー・マルレーン」がなぜ兵士の心をとらえたのか

ここで歌詞をみてみましょう。日本では、加藤登紀子さんとか、さまざまな有名人が訳詞を作っているのですが、メロディーに合わせて意味も正確に訳すことはとても難しいので、新しく創作した歌詞になっています。そこで私が、ドイツ語からメロディーに合うように自分で翻訳しました。何年か前に私の訳した歌詞で、声楽家の狭間壮さんがコンサートをしたこともあります。

リリー・マルレーン

兵舎のいかつい門の前、あの街灯がまだあれば、
もう一度会いたい。灯りの下で。
もう一度、リリー・マルレーン。もう一度、リリー・マルレーン。

二つの影は、とけあい、僕らの愛がすぐわかる。
みんなに見せよう、灯りの下で。
もう一度、リリー・マルレーン。もう一度、リリー・マルレーン。

消灯ラッパが鳴り響く。行かねばならない、今すぐに。
だからさようなら、君とは行けない。
僕のリリー・マルレーン。僕のリリー・マルレーン。

灯りは君を覚えてる。僕のことは忘れても。
もし僕が死んだら、誰かと来るんだろう。
僕のリリー・マルレーン。僕のリリー・マルレーン。

よどんだ大地の底から、君は僕を救い出す。
夜更けの霧にかくれ、灯りに立とうよ。
もう一度、リリー・マルレーン。もう一度、リリー・マルレーン。

リリー・マルレーンは「ぼく」の恋人で、二人は夜のわずかな自由時間に、兵舎門の前の街灯の下で会っています。そして消灯ラッパが鳴り響くと、二人は別れます。明日が出撃ならば、二人が会うのはこれで最後になるかもしれない、いつも覚悟を決めています。「ぼく」が戦死すれば、新たな恋人ができては仕方がありません。このつらい戦争の日々、「大地の底」から「ぼく」を救ってくれるのは、リリーと会っている時だけです。もう一度、街灯の下でリリー・マルレーンと会いたい。そう「ぼく」はいつも願っています。

愛するリリー・マルレーンにもう一度会いたい…という歌詞なのですが、これは行進曲のイメージで作曲されたものです。リリー・マルレーンにもう一度会うためにも、頑張って戦おうではないか…という意味をこめたものと思われます。アップテンポで歌うことが求められたのです。

ところが歌手ララ・アンデルセンにとっては、頑張って戦おうなどという思いはありません。むしろ戦争によって愛する人にもう会えないかもしれないという絶望感が、彼女の「リリー・マルレーン」のイメージです。そこでララは、この歌をゆっくり、やさしく歌いました。すると、この歌詞の「自分は戦争に行きたくないのだ」という意味が、聞く者の心に浮かびあがってきたのです。

3. ララ・アンデルセンの第二次世界大戦

あるときララのアパートに、段ボール箱数個に及ぶ大量のファン・レターが届けられ、彼女は歌の大ヒットを知ります。しかし彼女はまったく喜びませんでした。なぜなら、ドイツの戦争に自分が協力したような気がしたからです。

兵士たちの「リリー・マルレーン」の流行が、戦争はいやだという本音に寄り添っていたからだということを見抜いたナチスの幹部がいました。宣伝相ゲッベルスです。彼は「リリー・マルレーン」を毛嫌いしていましたし、ララを抹殺したいと考えていました。ララはあるときナチスに抵抗する秘密組織からスイスの恋人のもとに密かに亡命させてやるという申し出を受け、国際列車の切符を受け取り、希望を胸に乗車します。そしてその瞬間、ゲシュタポによって逮捕されました。ゲッベルスの仕組んだ罠だったのです。「リリー・マルレーン」は歌うことも、レコードが流されることも絶対禁止となりました。ゲッベルスの命令で国内のすべてのレコードが没収・焼却され、レコードの原盤も探し出されて“粉碎”されました。

ところがイギリスのBBC放送が、「ララ・アンデルセンが強制収容所に送り込まれ、死亡した」というニュースを流したことから、ドイツの兵士たちが怒りを爆発させました。「あのララが殺されたのか？」というわけです。あわてたゲッベルスは、ララが元気であること、その証拠に今まで通り前線の兵士たちの慰問コンサートを続ける、と声明しました。しかし彼は過酷な嫌がらせをララに続けました。つねにゲシュタポをララの脇に配置し、「リリー・マルレーン」だけは一切歌ってはならぬ、と命じたのです。命令に違反したら、厳正に処罰をする、と。

ところがララはアムステルダムでのコンサートで、ある作戦を実行しました。コンサートの最後でいつものように聴衆が「リリー・マルレーン！」と叫びます。ララはこう語りかけました。「わたしはこの歌をみなさまのために、何度も何度も歌ってまいりました。そこで、今日は、わたしのためにみなさまが歌ってくださらないでしょうか？」

消灯ラップの前奏が鳴り響き、ララが数小節を小声でハミングします。そして聴衆たちの「リリー・マルレーン」の大合唱が始まったのでした。再び、「リリー・マルレーン」がドイツの戦場によりみがえったのです。今度は何千、何万という兵士たちの歌声となって！ コンサートのしめくくりは、いつも監視していたゲシュタポがララに花束を贈る「儀式」をしなければなりません。でも、このアムステルダムのコンサートのとき、ララに花束を贈ったゲシュタポの青い目からは涙がこぼれていたそうです。

おわりに

私は、蘇南高校の皆さんに、苦しい時代だからこそ、自分のもっている能力・経験を総動員して目の前の課題をのりこえる「ブリコラージュ」の生き方が大切だと語ってきました。

第二次世界大戦の絶望的な最前線で、兵士たちが敵味方関係なく、「リリー・マルレーン」を聞いてつかの間の平和を実現していたことは、兵士たちの「ブリコラージュ」です。そして作曲者の意図に反して「リリー・マルレーン」をゆっくり歌い、また慰問コンサートで「皆さんが歌ってください」とゲッベルスの嫌がらせを乗り越えたことは、ララの「ブリコラージュ」でした。

そして、こうした「ブリコラージュ」を実現させたのは、苦しい時に人々の心を支えてくれる音楽・美術などの「アートの力」なのだと思います。

皆さん、心を支えてくれる「自分なりの何か」をもって、「ブリコラージュ」を続けていきましょう！